

第二十二話 現代の奇蹟

一昨年の五月、私はヨーロッパ旅行の途路、南フランスのルルドという町を訪問しました。ルルドといつても、日本人にとってはカトリック信者を除いては、別になんの記憶も意味もないでしょうが、ヨーロッパや米大陸では、フランスのルルドという小さな町の名を知らぬ人はありません。南フランスはピレネー山脈のふもと近く、四方を山に囲まれた風光明媚な田園都市……といつてもいわけぬ観光地ではないのです。観光地ではないのですが、世界の各国からこの町を訪れる人は一日数千人、多い時には万をもつて数えられます。大部分はカトリック信者であります。が、そういうおびたしい人々が毎日毎日、どこからかきてもどこかに去って行く巡礼の町、おそらく世界五億のカトリック信者のすべてが一生に一度は、自分の足で踏んでみたいと願うあの聖地、それがルルドなのです。

いったい、なにごとがあつてこの南フランスの一寒村ルルドが、そんなに有名になったのでしょうか？

それには、こういう話があるのです。それはちょうど今から百年前のことでした。その当時のこのあたりは、名もない貧しい村々にすぎませんでした。このルルドという村の中をガーヴ河という一本の川が流れ、その流れのほとりに、人々がマッサビエールと呼んでいたほら穴がありました。ちょっととした小高い丘の斜面が川のほとりで急に断崖となり、そこに幅五、六間、奥行三間位のほら穴を形造っていました。ちょうど百年前の二月十一日のこと、当時十四才になるベルナデッタという少女が、いとこたちや友人たちと薪拾いに行こうとして、なにげなくこのほら穴の前まで来たとき、突然、このほら穴の右上の小さな窪みに、キリストの母、聖母マリアの姿が忽然として現われるのを見たというのです。この超自然的現象は前後十八回にわたって繰り返されましたが、そのなん回目かに、ベルナデッタは出現の聖母マリアの指示に従つて、足下の地面を手で掘りましたところが、そこからコンコンと水が湧き出て、それが泉となり、その泉の水に浸ることによつて、瀕死の病人が突然奇蹟的になおるといふようになったのです。現に、私が参りました時も、オランダやドイツ、ベルギー、スペイン、イタリアなどから、瀕死の重病人や身動きできぬ不具者などを満載した特別列車がすでになん本もルルドの駅に到着していました。また、このほら穴の前には寝椅子に横たわったまま、ずらりと並んで熱心にロザリオをつまぐっている

に、そのままなおに信じていただけとは思っておりません。また一面から見ると、日本の合理主義にとっては、確かに迷信臭く見え、また、戦後の日本に発生した新興のご利益宗教を髣髴とさせるものがあるかもしれません。が、それにもかかわらず、私はあえて、それが迷信でもなければご利益宗教でもないことを言おうと思って、このお話を始めたのでした。もうしばらく私の話を聞いてください。

このルルドでは毎日、雨さえ降らなければ毎日です、午後の四時からカトリックで聖体行列という宗教行事が、数千、時には数万の人々の参列のもとに行なわれます。その行列の間に、聖体を奉持した司教がずらりと寝椅子に横たわったまま並べられた病人のひとりひとりの前に足をとめ、ひとりひとりの上に、奉持した聖体で十字を切り、神の祝福を祈るのです。ときとして、ほんとうにときとしてですが、奇蹟的全快が見られるのは、その瞬間なのだと言われています。私も、実は心の中では、あわよくば珍しい奇蹟を目撃したいものと、心に念じましたが、その日には奇蹟はありませんでした。しかし、考えてみると、奇蹟などは、どうでもよかったのですが、私には、病気が突然に全快するという、そのような目に見える奇蹟こそ目撃しませんでした。が、目に見えない、いわば精神的な奇蹟とも言われるものを無数に目撃したのでした。というのは、その日の聖体行列も終わり、私は、暮れなじむピレネー山麓の夕風を受けて、しばらく、ほ

おびただしい数の病人たちの姿を目撃したのでした。

カトリックの教義の中では、マリアというひとりの女性は、もちろん私たちと同様、神の一被造物にすぎませんが、神の子キリストにこの世の生命を与えた生みの母として、また、神の恩寵に満たされ、世にも祝福された、めずらかな女性として、更にはまた、罪の汚れを知らぬ清浄そのもの、最高の自己完成の姿を成就した理想の人間像として、心からの尊敬を捧げられています。この聖母マリアの、神のみ前における祈りのとりなしによって、不具の身から、不治の病からいやし給えと奇蹟的な全快を求めて、世界各国から群がりつどう病人の群。それと共に一生に一度は聖母出現の聖地をおのが足で踏みしめ、その出現の場所をこの目で仰ぎたいとねがう数千、数万に上る人々が、毎日毎日引きも切らずに押し寄せて来る巡礼の聖地……それは、実際にこの目で見ないことには想像もできない情景ですが、それがルルドなのです。ことに、今年はその聖母出現の年から数えてちょうど百年目に当たるといので、今年に入ってからすでに五百万人以上の人々が、ルルドを訪問したと伝えられています。

皆様は、きっと私の話を聞いて、カトリックという宗教を、旧態依然とした、迷信臭い、いわゆるご利益宗教の一つのようにお考えになったかもしれませんね。私も、このお話をしながら、聖母マリアの出現だとか、奇蹟的全快だとかいうことが、カトリックの信仰と全く縁のない皆様

ら穴の前にたたずんでいました。その時、ルルドの駅を發車するらしく、一声、かん高く汽笛の音が、静けさを破って響いた、と思ううちに、一本の列車が、ガーヴ河を隔てたあなたに姿を現わしましたが、ちょうど、ほら穴の前面を過ぎると思うころ、突然、列車の中からいっせいに、「マグニフィカト」という讃美歌の調べが、朗々として流れ始めました。見ると、それは重病人たちを満載した特別列車でした。奇蹟を求めて、不自由な身に苦痛を耐えて、はるばると、このルルドにまで運ばれて来た病人たちなのでしょうが、三、四日の滞在の後、彼らは、またしても困難な旅路を続けて、病む身をそのままにふるさとに持ち帰るのです。それにしても、その身動きできぬ病人たちが今、列車がルルドのほら穴の前をよぎり去るよと聞かされて、いっせいに歌い出した讃美の歌声と感謝の叫びです。皆様、皆様には、その意味がわかりでしょうか？ だが、皆様がおわかりになるうとなるとまいと、毎日毎日、この南フランスのルルドには、おびただしい病人たちが希望に胸ふくらませて群がり寄り、そして数日の滞在の後、来た時の希望はかなえられなかったにもかかわらず、全く別種の、感謝と感動と希望とに満たされて去り行くのです。「マグニフィカト！」それは、「わが魂は神をあがめまつり、わが心は救い主なる神によりて喜びにたえず、見よ、今より万代に至るまで、人みな我を幸いなる者ととなえん。云々」という、ラテン語の讃美歌なのです。いやされなかった病人たちを満載した一本の列車は、列車全体が讃

美の歌のこだまと化して意味深い余韻を、聞く人の心の奥底に響かせながら、南フランスの夕霧の中に消えて行きました。

病をいやされたいと望んだからこそ、はるばる山河を越えて苦しい旅路を続けた彼らでした。来るときには、病むことが苦痛であり、不具の身に生きることの重荷が、のしかかっていた。しかし、今は病がいえるかわりに心がいやされたのです。病む身はそのままに、生きることの悲しみと苦しみを取り除かれ、心満たされて、ほのぼのと讃美と感謝の歌を歌いつつ家路に着く彼らにとって、ふるさとの姿は同じであってしかも同じではなく、生きる姿は変わらぬながら、全く一変した生命が始まるのです。それは病がいやされるよりも、もっと大きな恵みであり、もっと驚嘆すべき奇蹟、いわば、次元を異にした精神的奇蹟ではなかったでしょうか？

皆様、彼らは悟ったのです。このルルドの聖地に滞在し、謙虚に祈りつつ、神と触れあうことによって、生きることの意義を知ったのです。人間存在の目的を理解したのです。そして同時に、病むことの中に、深い神の摂理を見たのです。

生きることの意義と、その目的……それは哲学ではありません。それは人間自身がその知恵をしぼって考え出したものでもありません。もしも、神が存在し、そして、私が神の被造物なのだとすると、私の存在の目的は、私を創造し給うた神の意中にあること。そして、その神の意志を

知る道はただ一つ、すなわち、神の啓示を、つまり神ご自身の言葉を信仰という器をもって受け取ることでありませぬ。全人類が知らねばならぬ人間存在の目的という、永遠の真理を、神より受けて人類に伝え、この真理を通じて神と人とを結ぶもの、それこそが、宗教というものなのですから……。

キリスト教という宗教は、キリストを通じて神より受けた不変の真理として、人間存在の真の目的を教えます。それは、神の愛によってこの世に生まれでた私たちが、不滅なる靈魂をもって再び神の愛なる永遠の生命という限りない幸福の懷に帰るべく召されているとの祝福された人間存在の驚くべき啓示であります。

皆様、私たちがこの世に生まれて来たのは、この世において富み栄え、肉欲の快楽をむさぼるためではなくて、神を愛し、神を愛するがゆえに、人間同志が互いに愛しあうことによって、愛の中におのれを完成しながら、ついに、再び神の愛の懷なる永遠の生命に帰る行ぐため、実にそのために生まれて来たのだという、この上なく高貴な人間の宿命を信じて受け取る時、皆様、生きるということは、なんと、満ち足りたことではないでしょうか？ 働けど働けど、今現に貧しくあるという生活の苦しみにあえぎつつも、また、再びゆる希望とてない病む身を病床に横

たえたままであらうとも、この世の生命が、永遠の生命に直結していると信じて、おのずから感謝の叫びと、神をたたえる讚美の歌が口をついてもれ出るとき、皆様、私たちの生命はなんと生きるに値いすると思ひにはありませんか？

ところで、私たちの幸福探求の行脚の旅もどうやら終わりに近くなつて来たようです。が、もうしばらく、もうしばらくご一緒に考えあつて行きましょう。

ではまた、来週のこの時間に。

皆様、さようなら。